

<研究ノート>

ウルドゥー語の否定、形容詞と連体修飾複文 Negation, Adjective and adjoint modification in Urdu

萬宮 健策
Kensaku Mamiya

東京外国語大学大学院総合国際学研究院
Tokyo University of Foreign Studies

要旨:

本稿では、ウルドゥー語を題材として例文の検討を行い、今回のテーマである否定や、連体修飾の特徴を明確にした。具体的には、否定については、否定辞 *nahīn* を、コピュラを含む動詞の直前に置くことで表現する。全否定と部分否定の差異や、否定辞を置く場所の差異についても検討を加えた。また、連体修飾のうちいわゆる『外の関係』については、関係詞を用いる構文が採られるが、『内の関係』の場合は関係詞を使う表現に加え、日本語のように文が名詞(句)を修飾することも可能である。今村[2008]ほか指摘するとおり、*wālā* を含む文については、今後の更なる検討が不可欠である。

また、今回のテーマに限らず、ウルドゥー語、ヒンディー語という日本国内での名称による区別が、言語学的な観点からどこまで有効なのかは、今後の検討課題である¹。

Abstract:

This article discusses Urdu, including Hindi, which should be considered as a social variant of the former from the viewpoint of linguistics. The negation, adjective and adjoint modification in Urdu are discussed through the sample sentences. Through the analysis of the sample sentences involving noun modification, it could be said that the participle “*wālā*” is worth further investigation.

キーワード: ウルドゥー、否定、形容詞、連体修飾

Keywords: Urdu, Negation, Adjective, Adjoint modification

1. はじめに

ウルドゥー語は、インド・ヨーロッパ語族のうち、現代インド・アーリヤ諸語(New Indo-Aryan Languages)の中央語群に属する言語である²。母語話者人口は、パキスタンおよび北インド地域を中心に約6000万を数える。SOVを基本とする屈折語である。他動詞完了分詞を用いる完了文にのみ能格構造が現れるほか、喜怒哀楽や義務強制を表す場合、与格構文を多用することが特徴の1つに挙げられる。

本稿では、例文の検討を中心として、連体修飾複文がどのように表現されるのかを、あらためて考えてみたい。例文の番号は、アンケートの番号に合致しているが、本稿での順序とは異なっている。



本稿の著作権は著者が保持し、クリエイティブ・コモンズ 表示 4.0 国際ライセンス(CC-BY)下に提供します。
<https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/deed.ja>

¹ あくまでも執筆者個人の私見であり、両言語が言語学的に同一である、ということをも主張するものではない。

² ヒンディー語とは、表記する文字が異なるものの、文法構造上は同一言語として見なすことができ、社会変種と位置づけることができる。本稿の例文では、ウルドゥー語とヒンディー語を区別せず、総称として便宜的にウルドゥー語という名称を用いることとする。

2. 先行研究

今回扱う内容に限らず、日本国内でウルドゥー語を対象とする研究は多くない。いわゆる狭義のヒンディー語を対象とすると、今村[2008]をはじめとして、その数は増えるものの、言語の規模から考えると不十分である。何がどこまでわかっているのかを整理し、研究者どうしが可能な限り協力する体制を整える必要がある。

3. 例文の検討

以下、項目ごとに分類した例文をもとに、ウルドゥー語の特徴を考える。前述のとおり、本項での例文に付された番号はアンケートの番号と一致している。

3. -1 コピュラ動詞文の否定

(1) これは私の本ではない。

yē mērī kitāb nahīn hai.
これ NOM. 私 GEN.F. 本 NOM.F.SG. NEG. コピュラ PRES.3.SG.

ウルドゥー語の否定文は、否定辞 *nahīn* を用いて作られる。コピュラ動詞文の場合、コピュラ動詞 *hōnā* の直前に *nahīn* を置くことで否定文になる。下記 3. -2 にまとめられた例文のうち (2) から (5) も同じ *hōnā* という動詞が用いられているが、こちらは存在動詞としての *hōnā* であり、同形だが意味が異なる。否定辞 *nahīn* は、*na* にコピュラ動詞である *hōnā* が付加されたものであると考えるので、例文 (1) から (7) については、文末の *hōnā* 動詞は省略も可能である。

3. -2 全否定と部分否定

全否定の場合、不定代名詞 *kōī* (誰か) (斜格形は *kisī*) もしくは *kuch* (何か) (斜格形は主格形と同形) と否定辞を併用する。*kōī* もしくは *kuch* のあとに別の名詞を伴わなければ、それぞれ、誰もいない ((4) 参照)、何もない ((3') 参照))、という全否定の意味になる³。

(2) この部屋には椅子がない。

is kamrē meṇ kursī nahīn hai.
この OBL.SG. 部屋 OBL.SG. LOC. 椅子 NOM.F.SG. NEG. コピュラ PRES.3.SG.

(3) この部屋には一つも椅子がない。

is kamrē meṇ kōī kursī nahīn hai.
この OBL.SG. 部屋 OBL.SG. LOC. 何か 椅子 NOM.F.SG. NEG. コピュラ PRES.3.SG.

(3') この部屋には何もない

is kamrē meṇ kuch nahīn hai.
この OBL.SG. 部屋 OBL.M.SG. LOC. 何か NEG. コピュラ PRES.SG.

³ 今回の例文にはないが、一度もない、という場合は、*kabhī* (ときどき) という副詞と否定辞を併用する。それ以外では、*bilkul* (全く) や *hargiz* (決して) という副詞と否定辞の併用で、「全く/決して～ない」という全否定文をつくる。この2つは、「全く食べなかった」や「全く大きくない」など、用言の否定にも用いることができる。*hargiz* は否定文にのみ用いられる。

(4) その部屋には誰もいない。

us kamrē meṇ kōī nahīṅ hai.
その OBL.SG. 部屋 OBL.M.SG. LOC. 誰か NOM. NEG. コピュラ PRES.3.SG.

(5) その本はこの部屋にない。

vō kitāb is kamrē meṇ nahīṅ hai.
その NOM. 本 NOM.F.SG. この OBL. 部屋 OBL.M.SG. LOC. NEG. コピュラ PRES.3.SG.

(12) 全ての学生が参加しなかった／学生は全員参加しなかった。

a. sab (sārē, pūrē) tālibe ilmōṅ ne hissā nahīṅ liyā.
全て OBL. 学生 OBL.M.PL. ERG. 参加 NOM.M.SG. NEG. 取る PAST.3.M.SG.

b. kisī tālibe ilmōṅ ne hissā nahīṅ liyā.
誰か OBL. 学生 OBL.M.PL. ERG. 参加 NOM.M.SG. NEG. 取る PAST.3.M.SG.

(13) 全ての学生が参加したわけではない。

sab tālibe ilmōṅ ne to hissā nahīṅ liyā.
全て OBL. 学生 OBL.M.PL. ERG. PTCL. 参加 NOM.M.SG. NEG. 取る PERF.3.M.SG.

(12) (13) はそれぞれ全否定、部分否定の例である。(12) で、全てという語彙のうち、() で囲まれた、sārē および pūrē はそれぞれ、(たとえば学内にいた) 学生が全員 (非限定)、(たとえば、学内にいた学生のうちある部屋にいた、もしくは、1 学年の) 学生は全員 (限定) という場合に用いる。sab は sārē と同義と考えて差し支えないが、厳密には学生全員という意味になる。部分否定では、不変化詞 to⁴を用いる。

3. ー3 形容詞と比較

(6) この犬は大きくない。

yē kuttā baṛā nahīṅ hai.
この NOM. 犬 NOM.M.SG. 大きい NOM.M.SG. NEG. コピュラ PRES.3.SG.

(7) この犬はあまり大きくない。

yē kuttā itnā baṛā nahīṅ hai.
この NOM. 犬 NOM.M.SG. このくらい NOM.M.SG. 大きい NOM.M.SG. NEG. コピュラ PRES.3.SG.

(8) この犬はあの犬より大きい。

yē kuttā us kuttē se baṛā hai.
この NOM. 犬 NOM.M.SG. あの OBL. 犬 OBL.M.SG. ABL. 大きい NOM.M.SG. コピュラ PRES.3.SG.

⁴ to は、その直前の語彙を、ほかと対比して強調したり限定の意味を加える。単独で用いられると、接続詞としても用いる語彙である。関係副詞節を受ける主文の文頭にも用いられる。

(9) この犬がその犬たちの中で一番大きい。

yē kuttā un kuttōḥ meḥ sab se baḥā hai.

この NOM. 犬 NOM.M.SG. その OBL.PL. 犬 OBL.M.PL. LOC. 全て OBL. ABL. 大きい NOM.M.SG. コピュラ PRES.3.SG.

比較、最上級は、上記 (8) (9) に示すとおり『比較対象＋奪格後置詞＋形容詞』で表現される。最上級は比較対象が「全て」という語彙になる。いわゆる叙述用法、名詞修飾用法ともに可能である。形容詞自体は比較級や最上級をつくらない⁵。

3. -4 否定命令

(15) 走るな！

a. daḥō mat!

走る IMP. NEG.

b. na daḥō!

NEG. 走る IMP.

(16) 大きな声を出すな！

a. ūḥī āwāz se na bōlō.

大きい OBL.F.SG. 声 OBL.F.SG. ABL. NEG. 話す IMP.

b. ūḥī āwāz mat dēnā!

大きい NOM.F.SG. 声 NOM.F.SG. NEG. 与える IMP.

否定文の命令には、自動詞、他動詞ともに、否定辞 *na* が用いられる。(15) a の *mat* は命令形にのみ用いられる否定辞で、*na* よりも否定の度合いが強くなる。また、倒置することで否定の度合いが一層強調される。話し言葉の場合は、語順に加えて文の抑揚や口調が否定の程度に大きく影響する。(16) の表現は、a. が、たとえば図書館内で親が子どもに対して言うことが想定されるのに対し、b. の表現は、大きな声で話さなくても聞こえている場合に用いられる。

3. -5 一般動詞の否定

(10) 今日はあの人は来ない。

āj vō ādmī nahīn āē gā.

今日 ADV. あの NOM. 人 NOM.M.SG. NEG. 来る FUT.3.M.SG.

(11) あの人はその本を持って行かなかった。

vō ādmī vō kitāb nahīn lē kar gayā.

その NOM. 人 NOM.M.SG. その NOM. 本 NOM.F.SG. NEG. 持つ CONJ. 行く PERF.3.M.SG.

(10) (11) は、一般動詞を含む否定文である。自他の区別なくどちらも動詞の直前に否定辞を置くことで否定文となる。なお、(11) は、ウルドゥー語では自動詞文である。他動詞文では、完了分詞を用いる場合、意味上の主語が能格構造となるが、否定文で否定辞が動詞の直前に置かれる点は自動詞の場合と

⁵ ペルシア語からの借用語彙の中には、比較級や最上級を持つ形容詞があるが、借用語であることと、使用場面が限定的であることから、本稿では検討の対象としない。また、一部のアラビア語から借用された形容詞は叙述用法のみに限定されるものがある。

同じである。口語では、(14) が示すとおり、否定辞を文末に置くことで否定の程度を強調することができる。

(14) (私は買わなかった。しかし、決して) 値段が高いというわけではない。

(main ne yē nahīn xarīdā hai, magar) us ki qīmat zyādā
私 OBL. ERG. これ NOM. NEG. 買う PERF.M.SG. しかし それ OBL. GEN.F.SG. 値段 NOM.F.SG. 多い ADJ.
to nahīn.
PTCL. NEG.

(17) 明日は雨は降らないだろう。

a. kal bāriš nahīn hōgī.
明日 ADV. 雨 NOM.F. NEG. 降る FUT.F.SG.
b. hō saktā hai ke kal bāriš na hō.
かもしれない PRES.M.SG. CONJ. 明日 ADV. 雨 NOM.F. NEG. 降る FUT.F.SG.

(17) では、a.が単純未来形の表現である(たとえば、天気予報での表現)のに対し、b.は話者の推量が含まれた表現である。接続詞 ke 以下の部分は、不確定未来形⁶を用いるため、否定辞は na となる。

(18) あの人に聞こえないように、小さな声で話してくれ。

halkī āwāz se batānā tāke vō na sun sakē.
小さい OBL.F. 声 OBL.F.SG. ABL. 話す IMP. CONJ. 彼 NOM.SG. NEG. 聞く STEM. 可能 FUT.3.SG.

目的節には、接続詞 tāke を用いる。この接続詞に続く節は不確定未来形となり、前述のとおり、否定辞は na を用いる。

(19) 私はあなたを怒らせようと思ってそう言ったんじゃない。

main ne āp ko nārāz karnē ke liye aisā to nahīn kahā
私 OBL. ERG. あなた OBL. DAT. 怒らせる INF.OBL. ために そう PTCL. NEG. 言う PAST.3.M.SG.

3. -6 連体修飾構造

(20) 私が昨日買ってきた本はどこ(にある)？

a. vō kitāb kahān hai jō kal main ne xarīdī?
その NOM. 本 NOM.F.SG. どこ コピュラ PRES.3.SG. REL.NOM. 昨日 ADV. 私 OBL. ERG. 買う PAST.F.SG.
b. kal mērī xarīdī huī kitāb kahān hai?
昨日 ADV. 私 GEN.F. 買う PERF.F. 本 NOM.F.SG. どこ コピュラ PRES.3.SG.

⁶ 話者が、出来事が起こることを確実でないと判断している場合に用いる未来形。相手の意向を尋ねたり、相手の動作を促す場合にも用いる。たとえば、「我々は来年パキスタンへ行く」という場合の違いは以下のとおり。

aglē sāl ham pākistān jāēn gē. (単純未来形：実際に実現するかどうかはわからないが、発話の時点で、話者はパキスタンへ行くという意味を有している)

aglē sāl ham pākistān jāēn. (不確定未来形：話者自身が来年パキスタンへ行くかどうかを決めていない)

内の関係を表現するには、関係節を用いるが、b.のような表現も可能な場合がある。動作主を強調する場合（この例文の場合は、昨日あなたも彼も本を買ったが、私が買った本はどこだ、という文脈での発話の場合）は、b.の表現が用いられる。動作主が属格となる点が特徴となる。

(21) その本を持って来た人は誰（か）？

- a. vō kaun hai jō vō kitāb lāyā hai?
 それ NOM. 誰 コピュラ PRES.3.SG. REL.NOM. その NOM. 本 NOM.F.SG. 持って来る PERF.3.M.SG.⁷
- b. vō kitāb lānē=wālā kaun hai?
 その NOM. 本 NOM.F.SG. 持って来る INF.OBL.=PTCL. 誰 コピュラ PRES.SG.

この文(21)も内の関係を表現している。関係節を用いる a.の文以外に、分詞 wālā を用いる文 b.も可能である。今村[2008]でも wālā のふるまいが議論されているが、a.と b.との差異をはじめとして、コーパスをもとにした研究が必要な点である。

(22) この部屋が私たちの仕事をしている部屋です。

- yē vō kamrā hai jahān ham kām kartē haiṅ
 これ NOM. その NOM. 部屋 MON.M.SG. コピュラ PRES.3.SG. REL-ADV. 我々 仕事 NOM.M.SG. する PRES.M.PL.

(23) 足が一本折れたあの椅子はもう捨ててしまった。

- maiṅ ne vō kursī chōṛ dī jis ki ēk tāng tūṭī huī thī.
 私 OBL. ERG. その NOM. 椅子 NOM.F.SG. 捨てる PAST.F.SG. REL.OBL. GEN.F. 1 足 NOM.F.SG. 折れる PAST-PERF.F.SG.

(24) ドアを叩いている音が聞こえる。

- darwāzē par dastak dēnē ki āwāz ā rahī hai.
 ドア OBL.M.SG. LOC. 叩く INF.OBL. GEN.F. 音 NOM.F. 来る PRES-PROG.F.SG.

(25) あの人が結婚したという噂は本当（か）？

- a. us ādmī ki śādī hōnē ki afwāh sac hai?
 あの OBL. 人 OBL.M.SG. GEN.F. 結婚する INF.OBL. GEN.F. 噂 NOM.F.SG. 本当 NOM.M.SG. コピュラ PRES.3.SG.
- b. kyā yē afwāh sac hai ke us ādmī ne
 虚辞 この NOM. 噂 NOM.F.SG. 本当 NOM.M.SG. コピュラ PRES.3.SG. CONJ. あの OBL. 人 OBL.M.SG. ERG.
 śādī kī?
 結婚する PAST.F.

外の場合を表す場合、動作+属格後置詞という構造を採る。(24)では『ドアを叩く』+属格+『音』で表される。一方、日本語で「トイウ」で表される文は、(25) b.のように動作主を明示している場合には a.の構文に加え、複文でも表すことができる。

⁷ 「持ってくる」という動詞は他動詞だが、完了分詞を用いる場合でも例外的に能格にならない。同様の例外には、話す、忘れる、理解するという動詞が含まれる。

(26) 私はその人が来た時にご飯を食べていた。

- a. (us waqt) main khānā khā rahā thā jab vō ādmī āyā.
(その時) 私 NOM. 食事 NOM.M.SG. 食べる PAST-PROG.M.SG. REL-ADV. その NOM. 人 NOM.M.SG. 来る PAST.M.SG.
- b. jab vō ādmī āyā, (us waqt) main khānā khā rahā thā.
REL-ADV. その NOM. 人 NOM.M.SG. 来る PAST.M.SG. (その時) 私 NOM. 食事 NOM.M.SG. 食べる PAST-PROG.M.SG.

(26) は、b.に示したように、関係詞から始まる節を先に持って来ることも可能で、情報構造に関係する。さまざまな場面が想定されうるが、原則として先に述べる文が、話者が強調したい部分である。教科書的な説明では、(26) a、(27) のとおり関係節は通常あとに来る。

(27) 私はその人が待っている所に行った。

- main us jagah gayā jahān vō ādmī mērā intizār kar rahā thā.
私 NOM. その場所 ADV. 行く PAST.M.SG. REL-ADV. その NOM. 人 NOM.M.SG. 私 GEN.M.SG. 待つ PAST-PROG.M.SG.

(28) 私はその人が走っていったのを見た。

- main ne us ādmī ko daurā huā dēkhā.
私 OBL. ERG. その OBL. 人 OBL.M.SG. DAT. 走る PAST-PTCL.M.SG. 見る PAST.M.SG.

(29) 昨日の夜、私は彼らがしゃべっているのを聞いた。

- kal rāt main ne unhēn bātēn kartē huē sunā.
昨日夜 ADV. 私 OBL. ERG. 彼ら DAT. 話す PRES-PTCL.M.PL. 聞く PAST.M.SG.

動作主の目の前で動作が進行している場合は、未完了分詞を (29)、動作が完了している場合は、完了分詞を用いる (28) が、文の構造はどちらも共通である。ただし、その動作が自動詞で表される場合は、その動作主の性・数と動詞語尾が一致するのに対し、他動詞の場合は、動作主の性・数と無関係に常に男性複数形が用いられる⁸。

(30) 私はその人が昨日ここに来たことを知っている。

- main jāntā hūn ke vō ādmī kal yahān āyā thā.
私 NOM. 知る PRES.1.M.SG. CONJ. その NOM. 人 NOM.M.SG. 昨日 ADV. ここ ADV. 来る PAST-PERF.M.SG.

(31) (昨日) 彼は彼が今日ここに来たと言った。

- a. kal us ne kahā hai ke vō āj yahān āyā thā.
昨日 ADV. 彼 OBL. ERG. 言う PRES-PERF.M.SG. CONJ. 彼 NOM. 今日 ADV. ここ ADV. 来る PAST-PERF.M.SG.
- (昨日) 彼は、「私は今日ここに来た」と言った。
- b. kal us ne kahā hai ke "main āj yahān āyā thā".
昨日 彼 OBL. ERG. 言う PRES-PERF.M.SG. CONJ. 私 NOM. 今日 ここ ADV. 来る PAST-PERF.M.SG.

小説などでは直接話法的な表現が見られ、引用符で会話部分を囲むことで表現される。それ以外では、いわゆる間接話法の構造が採られる。その場合、時制の一致は特に意識しなくてもいいが、一般的に、

⁸ 方言差があることに留意。

主節が単純過去もしくは現在完了形で現れ、従属節はそれより前のことを表すため、過去完了形になる。

(32) 私はリンゴが (あの) 皿の上にあったのを食べた。

a. main ne vō sēb khāyā jō us plēt par
私 OBL. ERG. その NOM. リンゴ NOM.M.SG. 食べる PAST.M.SG. REL.NOM. その OBL. 皿 OBL.F.SG. LOC.
thā.
コピュラ PAST.M.SG.

b. main ne vō sēb, jō us plēt par thā,
私 OBL. ERG. その NOM. リンゴ NOM.M.SG. REL.NOM. その OBL. 皿 OBL.F.SG. LOC. コピュラ PAST.M.SG.
khāyā.
食べる PAST.M.SG.

c. main ne (us) plēt par vō sēb khāyā hai.
私 OBL. ERG. その OBL. 皿 OBL.F.SG. LOC. その NOM. リンゴ NOM.M.SG. 食べる PRES-PERF.M.SG.

(33) 私はネコが家に入ってきたのを捕まえた。

a. main ne ghar ke andar ā billī ko pakar liyā.
私 OBL. ERG. 家 OBL.M.SG. GEN.OBL. 中 ADV. 来る PAST.F. ネコ OBL.F.SG. DAT. 捕まえる PAST.M.SG.

b. main ne us billī ko pakar liyā jō ghar ke andar
私 OBL. ERG. その OBL. ネコ OBL.F.SG. DAT. 捕まえる PAST.M.SG. REL.NOM. 家 OBL.M.SG. GEN.OBL. 中 ADV.
ā thī.
来る PAST-PERFF.SG.

c. main ne us billī ko, jō ghar ke andar ā thī,
私 OBL. ERG. その OBL. ネコ OBL.F.SG. DAT. REL.NOM. 家 OBL.M.SG. GEN.OBL. 中 ADV. 来る PAST-PERFF.SG.
pakar liyā.
捕まえる PAST.M.SG.

(32)、(33) はともに、いわゆる主要部内在型関係節文であるが、ウルドゥー語では、その構造をそのまま表現することはできず、(32) ではリンゴ、(33) ではネコという名詞を修飾する連体修飾構造に置き換えて表現される。なお、(32) b.および (33) c.が示すとおり、関係詞節を文中に置くことも可能であるが、一般的な語順ではない。連体修飾構造を用いる文が具体的にどのような構文となるのかについては、属格後置詞を用いる場合、接辞 *wālā* を用いる場合の用法も合わせて考える必要があり、今村 [2011]をもとに、その使い分け、表す意味の差異をより多くの例文を収集して分析する必要がある。

4. まとめに代えて

本稿では、与えられた例文をもとに、否定、形容詞及び連体修飾に焦点を当て、分析を行った。

否定に関しては、原則として動詞の直前に否定辞を置くことで、否定文が形成されることが、例文により明らかである。注意すべきは部分否定で、加賀谷[2005]が不変化詞と呼ぶ *to* を挿入することにより表現され、語順も文意に影響している。また口語の場合、文の抑揚も関与している場合が多い。

形容詞については、形容詞自体は比較級、最上級を形成せず、日本語と同様に奪格後置詞を用いて比較対象との対比を行う。

連体修飾複文については、関係節を用いることが多いが、文による節どうしの関係の差異については、これまでに先行研究で触れられたことがほとんどなく、今後の課題としたい。

ウルドゥー語は、話者の居住地域が広範であるだけでなく、いわゆるヒンディー語とウルドゥー語の差異を考え合わせると、今回提示した例文とは異なる結果が出る可能性もある。したがって、いわゆるヒンディー語とウルドゥー語の研究者どうしの連携が非常に重要であることは、この場を借りて強調しておきたい。

本稿執筆にあたり、東京外国語大学特定外国語主任教員（ウルドゥー語担当）であるアーミル・アリー・ハーン氏（パキスタンのカラチ出身 40 代男性。母語はウルドゥー語）に助言を得た。記して謝意を示したい。

参考文献

- 今村泰也.2008.「ヒンディー語の<V-ne-vālā honā>の三用法—属性叙述から事象叙述へ、客観的叙述から主観的叙述へ—」,『南アジア研究』第 20 号（日本南アジア学会）, pp.7-28.
---. 2011.「日本語から見たヒンディー語の連体修飾構造—いわゆる「外の関係」を中心に—」『日本語と X 語の対照 2』（三恵社） pp.1-10.
加賀谷寛. 2005. ウルドゥー語辞典. 大学書林

執筆者連絡先: k_mamiya@tufs.ac.jp

原稿受理:2019 年 5 月 13 日